

[論文]

障害者の表現活動における 「こぼれ落ちていくもの」を探究する視点： 活動におけるプロセスや関係性を軸とした 文献レビューからの考察

高石 萌生(九州大学大学院芸術工学府 博士後期課程)

要旨

本稿では、障害者の表現活動において、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品を重視することの問題点、そして活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性に着目した先行研究のレビューを行い、その上で、日常のケアや表現の現場で生まれつつも見過ごされてしまうもの、先行研究によっても未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」の探究に向けて必要な視点を検討した。先行研究は、『『アール・ブリュット』『アウトサイダー・アート』と障害者による創作物の同一視』『福祉の論理と芸術の論理の調和の困難性』『作品重視の傾向から生じうる非対称な関係』『プロセスや関係性へのまなざし』の4点にまとめることができた。プロセスや関係性に着目した研究は、障害当事者の生を支える、また、社会包摂概念が内包する矛盾に直面した支援者が抱える葛藤が人と人の間にある境界線を揺るがす契機にもなるという2つの方向性で、プロセスや関係性がもたらすものを顕在化させていた。最終的には、「接面」という概念に基づいて考察を行った。障害者の表現活動では、その中でのプロセスや関係性において、人と人の間に接面が生まれ、様々な情動の動きが生じるが、それは「こぼれ落ちていくもの」となりうる。プロセスや関係性に関する先行研究は、障害者を中心に据える前提のもと接面で生じることの一側面を拾い上げて顕在化させてきたのであり、接面で生じることの中には、まだ触れられていない側面、未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」もある。そこで、その探究に向けて、現場で生まれる接面に研究者自身が当事者として接し、障害者を中心に据える前提を取り払った上で、障害者だけでなく、研究者自身や支援者の情動の動き、研究者自身や支援者にとってのその意味を丁寧に描き出すという研究の視点を提案した。

Key word

障害者の表現活動、プロセス、関係性、こぼれ落ちていくもの、接面

はじめに

1. 本稿の目的

本稿では、障害者の表現活動¹⁾において、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品を重視することについて指摘されてきた問題点、及び活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性に着目した先行研究のレビューを行う。それを踏まえ、日常のケアを介しながら行われる表現の現場で生まれつつも見過ごされてしまうもの、先行研究によっても未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」を探究するために求められる視点がいかなるものなのかを検討する。

2. 研究の背景

国内の障害者の表現活動においては、障害者による創作物を美術の文脈を軸として芸術的価値の高さによって評価したり市場と結びつけたりする風潮が強まる一方で、最終形としての創作物ばかりではなく、活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性に重要性を見出す議論や実践も長らくなされてきた。学術的な研究では、第4章で詳述するが、2001年に社会学者の藤澤三佳が障害者の表現活動に関する論考の中で、「人が表現するプロセスそのものを『芸術』として定義するという発想の転換」の必要性を主張し[藤澤2001:109]、それ以降、複数の研究者によって、表現活動におけるプロセスや関係性にある意義について議論や理論構築が行われてきた。その中で文化人類学者の中谷和人は、作品の評価を美術界に委ねることで、障害のある作家と支援者の間に生まれるかもしれない関係性が制限されうること、また美術界の評価軸からはみ出る創作や表現が捨象されうることを指摘し、これらを「こぼれ落ちていくもの」と表現している[中谷2009]。

現場での実践においても、プロセスや関係性に重きを置く様々な取り組みが展開されてきた。プロセスの中で生まれる関係性に着目した例を挙げると、2014年に福島県に開館したはじまりの美術館では、福島県障がい者芸術作品展「きになる²⁾ひょうげん」が2017年度から毎年開催されている。この展覧会では、「作品の技術や巧さだけではなく、なんだか惹きつけられて『きになる』をひとつの基準」として福島県内で〈作品〉を募集し、審査と展示を行う[はじまりの美術館n.d.]。タイトルにある「²⁾」は、「作る人、支える人、見つける人など、さまざまな関係性を表して」いるという[はじまりの美術館n.d.]。このような、障害者とその周囲の人との関係性から見出されたものを〈作品〉とみなす考え方も広まってきている。ここで、作品という言葉には二通りの意味合いがあると言える。表現におけるプロセスや関係性とは関係なく、芸術的価値や市場価値を評価される対象としての最終的な形をもつ創作物を指す場合と、プロセスや関係性そのものを含む形で作品という概念が捉え直された場合である。本稿ではこの2つを区別するため、後者の意味合いで用いる場合は〈作品〉と表記する。

また別の例として、静岡県認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツと表記)は、多彩な障害福祉事業と文化事業を展開しているが、その一つに「表現未満、」プロジェクトというものがある。「『表現未満、』とは、アートが特別な人の特別な行為ではなく、普通の市民一人一人にある自分を表す力、振る舞いを『とるに足らない』と一方的に判断しないで、その人固有の『表現』と捉え、この行為こそが文化創造の軸であるという考え方である」という[久保田2020]。レッツはアートNPOであるが、創作物を生み出すことにこだわらず、障害者が行うアート活動として想定されてきた既存の枠組みや価値観からはみ出るような実践を生み出し続けている。

これらの例は、日本全国で実施されている障害とアートをめぐる取り組みのごく一部にすぎず、国内での取り組みは実に多様化している。村谷つかさは、やまなみ工房(滋賀県)、工房まる(福岡

県)、工房集(埼玉県)などを例に挙げ、これらの障害福祉施設では、芸術的価値が高いとして国際的な評価を得る作品が多く生み出されているが、作品の創作以外の活動内容も多岐に渡っていると、それを「障がいのある人が持つ多様な価値が表出したものに対し、支援者が社会につなげる道筋を柔軟に発想し実行している結果」と表している[村谷2018:51]。ここでは、芸術的価値の評価を得る作品を生み出す施設における活動の多様さやそれを可能にする支援者の存在に触れているが、そうした支援者²⁾の実践は、芸術的価値を評価される作品の創作に繋がるか否かにかかわらず、上記のはじまりの美術館やレッツをはじめ、多くの取り組みに共通するものであると考えられる。障害者の表現活動を作品の芸術的価値や市場との結びつきから評価するのは一つの捉え方ではある。しかし、それだけに依拠しては、人と人が日常的なケアを介しながら関わる表現活動の現場において、明確な形も言葉もなく曖昧に生じる様々な出来事や感覚を含む、活動のプロセスやその中での人々の関係性が、中谷の言葉を借りれば、「こぼれ落ちていくもの」となってしまう。今日まで続く国内での取り組みの多様な展開は、それを何とかすくい上げ、一つの形ある取り組みを生み出して社会に伝えようとする、支援者の挑戦や試行錯誤の現れではないではないだろうか。そしてそれは同時に、これまでの様々な実践や研究があってもなお光が当てられず、「こぼれ落ちていくもの」となり続けている側面があるということの意味しているのではないだろうか。

障害者の表現活動におけるプロセスや関係性に関する研究は、これまで複数の研究者によってなされてきたが、現時点でそれに焦点を当てたレビュー論文は存在しない。そこで本研究では、障害者の表現活動におけるプロセスや関係性に着目した先行研究をレビューし、未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」を探求するために求められる視点を検討する。なお、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品ばかりを重視することに対して指摘されてきた問題点についても併せてレビューを行い、プロセスや関係性に関する議論との関係性も整理する。

1.方法

1.文献の選定方法

本研究では、国内で障害と関連して行われる表現活動に関して、芸術的価値の評価や市場と結びつく作品を重視することに対して問題点を提示する文献、及び活動のプロセスやその中での人々の関係性に言及する文献を対象とする³⁾。国内の障害福祉施設で絵画などの創作活動が盛んに行われるようになったのは1990年以降であることから[服部2009]、発行の期間は1990年から2023年まで、文献の種類は国内の学術雑誌に掲載された論文及び学術書とする。

文献の選定方法としては、まずCiNii Researchにて、データ種別を「論文」、期間を1990年から2023年、言語種別を日本語と設定し、障害や福祉に関するキーワードを「障害」「障がい」「福祉」、表現活動に関するキーワードを「表現」「芸術」「アート」「美術」「創造」「創作」「造形」「オール・ブリティッシュ」「アウトサイダー・アート」としてタイトル名で検索した(最終閲覧2023年10月22日)。次に、題名や抄録、掲載雑誌名等を確認し、重複した文献、会議録、総説や解説等を除外して原著論文のみを対象とした。そして本文を確認し、精読を通して条件に合う論文を選定した。その後、それまで確認した文献から、引用文献や参考文献のリストに記載された文献、障害者の表現活動

をテーマに盛んに研究を行っていると思われる著者を補足的に検索し、精読を通して条件に適合と判断された論文及び書籍を追加した。

2. 分析の方法

国内の障害者の表現活動に関する文献レビューに、小野田由実子による論文がある[小野田2022]。小野田は、障害福祉サービス事業所等における表現活動に関する先行研究や先行調査の文献レビューを行っており、系統立った文献選定の後、分析は概ね、該当箇所の切片化とコード化、カテゴリーの生成、そしてカテゴリー同士の関係性の検討という手順でなされている[小野田2022]。この分析方法は、大木秀一が質的研究との類似性から文献を「質的に統合する」方法として提示している作業に則っている[大木2013:82]。研究の結果としては、「障害福祉サービス事業所等における障害のある人の表現活動の成果は、障害のある人だけの一面的な成果ではなく、家族、支援者、地域・社会など『多面性』があり、『相互性のあるプロセス』として現れることが明らかになった」としている[小野田2022:43]。

小野田が採用した分析方法は、質的研究の手法の一つであるグラウンデッド・セオリーを連想させる。グラウンデッド・セオリーでは、複数人の語りの記録を本来の文脈が分からなくなるほどまで細かく分解し、そこから共通するカテゴリーを生成していくという、一定の客観的な手続きで分析することで科学的な成果が得られるとするものである[西2015]。しかしこのような方法には、実際のインタビューや研究で体験されるものからの乖離やその中での気づきの阻害を引き起こし、「おそらく言葉のもつ表面的な共通性しか取り出すことはできない」という指摘がある[西2015:180]。この観点から考えると、小野田の論文は、先行研究や先行調査の記述を細かく切片化しており、本来の文脈との繋がりが見えにくく、そして自身も研究の限界として述べているように、相互作用があると示唆された障害当事者、家族、支援者、地域・社会の間の関係の詳細には言及していない[小野田2022]。

本研究が目指すのは、障害者の表現活動の現場で生まれても容易に消えてしまうような些細な事象や心の動きを含む「こぼれ落ちていくもの」を捉えるための視点を検討することであり、この態度は文献レビューにおいても通底すべきものと考えた。そうした「こぼれ落ちていくもの」はまさに、グラウンデッド・セオリーのような一定の客観的な手続きを経ると捨象されてしまうものである。したがって、本研究では、先行研究の記述の切片化やコード化といった手順は踏まず、本来の文脈や主張の特色をできるだけ保持した形で各文献の要約や該当箇所の抜粋を行い、その内容の類似性や対照性、関連性、文献間での引用関係を考慮しながら文献を整理した。

2. 結果

その結果、先行研究を以下の4点にまとめることができた。

1. 「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」と障害者による創作物の同一視
2. 福祉の論理と芸術の論理の調和の困難性
3. 作品重視の傾向から生じる非対称な関係
4. プロセスや関係性へのまなざし

芸術的価値の評価や市場と結びつく作品を重視することの問題点は1～3の論点から整理できた。プロセスや関係性に着目した研究は4にまとめている。以下、それぞれを順に具体的に見ていく。

1. 「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」と障害者による創作物の同一視

「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」という言葉は、いずれも主に「正規の美術教育を受けていない者による作品」を指す西洋で生まれた美術用語であり、本来は障害者の作品のみを指すわけではない。しかし、日本ではそれらが障害福祉と密接に関わり、障害者による創作物を意味する言葉として解釈される傾向にあり、さらに障害者の社会参加やエンパワメントと結びつけて用いられる場合も多い。この点に関して、服部正を中心に複数の問題点が指摘されている。

まず、「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」は本来、西洋の制度化された美術の公的な枠組みに抵抗するために作られた概念であり、障害福祉の観点から見ると、その原義は障害者の包摂を意識した概念ではない[知足2008]。それにもかかわらず、日本では障害者による作品を指すものとして使われ、特に「アール・ブリュット」は今や行政と深く結びつき、障害者の芸術活動の振興という政策的意図の下で使用されていると服部は指摘する[服部2018]。さらに、服部によれば、「アール・ブリュット」というフランス語は元々の意味が分かりにくく、「障害者アート」や「アウトサイダー・アート」という言葉がもつ排他的ニュアンスを避けられることから行政に好まれる傾向にある[服部2018]。

服部は、「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」を障害者による創作物と同一視して用いることは、障害者の囲い込みに繋がる危険性があるとし、そのことは福祉の理念に反し、かつその囲い込みが美術関係者よりも障害者の芸術活動の振興を目指す福祉や行政の立場の人たちによってなされるという逆説的状况が生まれていることを問題視する[服部2019]。そして、「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」という言葉の使用が、それらが内包している障害者に対する排他的構造を隠蔽すること[服部2018;2019]、またそれらが本来有する既存の美術や権力への異議申し立てという批判的価値を無にしてしまうことにも警鐘を鳴らす[服部2018]。

こうした「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」という言葉の使用をめぐる言説には、日本の障害者による表現活動の振興における、福祉と芸術の論理の調和の困難性、障害者に対する非対称な関係の再生産という、次に述べる2つの論点が含まれている。

2. 福祉の論理と芸術の論理の調和の困難性

障害者の表現活動においては、障害福祉が美術界に参入することで、平等原理をもつ福祉の論理と芸術性の高い作品を求める芸術の論理が衝突する場合が多い[藤澤2001;2014]。この衝突に対し、どちらか一方を重視するのではなく、福祉と芸術の両分野の調和が必要であると唱えられてきたが[藤澤2001;2014]、一方でその実現可能性を疑う声もある。武山梅乗は、福祉と芸術は全くの別の世界であり、両者の融合という解決策はいささか楽観すぎるという見解を示す[武山2018]。

SEINOは、近年の障害者による表現活動は障害者問題の解決に向けた社会変革よりも、自己表現の追求とそれに対する評価・報酬という個人の幸福実現としての福祉的役割に目的を見出している」と述べる。そしてそうした活動が、貨幣価値に変換可能な「商品」としての作品の芸術的価値に重きを置き、健常者中心の秩序で成り立つ社会の中で実利を得ようとしている点で、「物質主義型芸術」にあたると批判する[SEINO 2016]。また飯守桂一は、2000年代にアートに特化した施設が多く誕生し、従来の福祉では問題行動とされていた事柄が表現行為と捉え直されるケースも見られるようになり、美術関係者が芸術の論理、福祉関係者が福祉の論理を主張するという構図では一概に捉えられなくなったと指摘する。しかし、障害者が表現を行う場として施設が妥当とされ続ける現状には、依然として障害者を特殊な存在とみなして分離された領域に置こうとする根深い処遇感があるとも述べている[飯守2018]。このように福祉と芸術が重なり合うことで生じる矛盾も指摘され、両者の調和の困難性が示唆されている。

3. 作品重視の傾向から生じる非対称な関係

芸術的価値の評価や市場と結びつく作品を重視することで生じる非対称な関係について、まず、大胆な色遣いや繰り返しなどの特徴をもった作品が評価される傾向にあり、作品を観る側、サポートする側が作品に「障害者らしさ」を求めている可能性があるという指摘がある[川井田2010]。このような障害と結びつけた評価や価値づけがなされることにより、障害者を疎外する状況が生まれる。また、社会的弱者である障害者を批判してはいけないという心理的抑制が働くなど[知足2008]、「障害」という肩書きが美術批評や作品研究を阻むラベルとして機能し、障害者による作品が現代美術から阻害されている状況がある[服部2015]。さらに知足美加子は、障害者を他者として疎外する状況を「障害者の他者性」と位置づけた上で、「障害者芸術」というカテゴリーが障害者という属性を強調し、障害者の他者性を固定化する可能性がある」と主張する。障害者を善意の対象、社会的な苦痛を代行してくれる救いと捉え、障害者芸術を持ち上げ礼賛することで、当事者が抱える問題を脱色して鑑賞者はポジティブなイメージのみを享受し、それが障害者の社会的疎外の再生産に繋がると批判する[知足2008]。

一方で、障害者による作品がむしろ現代美術の枠組みや既存の芸術制度を批判し、アウトサイダー／インサイダーの境界を揺るがす意図の下で用いられることもあるが、その発想自体が非対称な関係を内包しているという意見もある。中谷は、現代美術とその背景にある制度を批判するのに相応しいアンチテーゼとなるものを判断するのは「イン」の側であるとし、そのような「能動的権能をもつのがつねに『イン』(＝非障害者、美術界、西洋)の側であり、『アウト』(＝障害者、非美術界、日本を含む非西洋)は受動的な対象に閉じ込められる」と述べる[中谷2009:220-221]。そして、この「アウト」によって芸術の「普遍性」を語る時、そこに潜む非対称な権力関係は完全に捨象され、「アウト」は他者として排除されると指摘する。中谷はさらにフィールドワークを通して、障害者による多様な創作物を美術界という外部を通じてしか語りえないという限界を明らかにしている[中谷2009]。

また、表現を行う障害者本人の意思との関係を疑問視する声もある。藤澤は、特に意思疎通が困難な知的障害者の創作物について、それが作品としての評価を高める一方で、本人は特段社会との関わりを求めてはいないという事例に触れ、創作物からの作者の不在を指摘する。加えて、本人の意思とは関係なく外部の人々とのコラボレーションがなされる例も挙げ、障害者やその表現物の一方的に侵食されやすい性格を示している[藤澤2001;2014]。

ここまでは障害者と健常者を隔てて生じる非対称な関係についてであったが、美術界や市場から

評価を得られる作品を重視する傾向は、障害者間の関係にも歪みを生む可能性がある。例えば、評価や収入に繋がる一定のレベルに達していない人は排除されるということが起こりうる[本間・堀尾2004]。それは、創作を行う障害者間の収入格差や[川井田2010;2013]、新たな差別を生むという批判を誘発することがあり[川井田2013]、さらには本来の目的に反してその人たちのセルフエスティームを損なう恐れもある[SEINO 2016]。

4. プロセスや関係性へのまなざし

本節では、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品ばかりを重視すると見過ごされてしまう側面として、活動のプロセスやその中に含まれる人々の関係性に重点を置いた議論について述べる。プロセスや関係性に関する研究においては、それ以前の研究に依拠しながら論が進展していく様子が見られたため、ここでは基本的に時系列に沿って論述する⁴⁾。

文献の内容の類似性や文献間の引用関係から、次のような議論の展開が見出された。まず、作品を重視する傾向に対し、プロセスや関係性にも目を向ける必要性が提起される[(1) プロセスや関係性への着目]。そしてそれを掘り下げ、障害当事者の生を支える[(2) 障害当事者の生を支えるプロセスや関係性]、その場に関与する人々の間にある境界線を揺るがす[(3) 境界線を揺るがすプロセスや関係性]という2つの方向性で、プロセスや関係性が具体的にもたらすものを顕在化させる議論が深められていくという流れである。以下、この詳細を述べる。

(1) プロセスや関係性への着目

藤澤は、表現者と表現物を切り離し、その表現物を「芸術的作品」として芸術の世界で評価することは、社会にも芸術の世界にも根本的な変化はもたらさないと考え、表現活動が行われる場とそれを通じた人や社会との交わりに注目し、「人が表現するプロセスそのものを『芸術』として定義するという発想の転換が求められる」と主張した[藤澤2001:109]。

そして、最終形としての作品を重視すると、活動のプロセスで生まれる人々の関係性が見落とされるという点が注目されていく。岸中聡子は、障害者による作品を作者個人の内面の発露と捉える作品観がある一方で、障害のある人から表現が生まれ、それが作品となって社会で認められていくプロセスには、本来、表現を行う者とそれに対して援助や働きかけを行う者との間の多様な関係性が含まれているとし、そうした障害者による表現活動は、障害者と彼らに関わる人たちとの「共同性」の発露であるという考えを示した[岸中2004]。その上で、作品のみで評価を行うことが「相互関係性によって生まれる作品の魅力や、関係性そのものが持つダイナミズムを見落とすことになる」と述べた[岸中2004:385]。また中谷も、創作や表現には個人の欲求や情動だけでなく、施設職員などの他者との関わりがあるという点で、表現活動の現場での社会関係に多元的な意味があるとする。しかし、美術界のまなざしや制度の介在により、そこからこぼれ落ちる創作や表現があること、現場に生じる葛藤や矛盾、相互行為や社会関係にある表現活動の多元的な意味が捨象されてしまいかねないと指摘する[中谷2009]。

さらに、こぼれ落ちてしまうプロセスや関係性そのものを〈作品〉として扱うことが提案される。中務のぞみは、「作り手の生きる日常—社会関係そのものを作品に露出」することが、鑑賞者に日常の視点から自らの問題として障害を問い直すことを促し、知足が述べた障害者の他者性の固定化を乗り越える一つの手段になると提起する[中務2010:38]。

(2) 障害当事者の生を支えるプロセスや関係性

プロセスや関係性への着目の提起から一步踏み込んで、それらが生きづらさを抱える障害当事者

の生を支える可能性を有するものであることが、藤澤と荒井裕樹によって同じ精神科病院の造形教室を事例として描き出される。

藤澤によれば、その造形教室の講師は「患者」に対して「専門家」ではなく友人や仲間のような関係を築いており、また「治療やアート作品を究極の目的とせず、人間への存在論的な包容」がある教室を作り上げている[藤澤2014:21]。生きづらさを抱えて造形教室に通うメンバーは、表現による自己治療力を発揮するだけでなく、共に活動する人たちと互いを包容し合う関係や〈作品〉の鑑賞者といった他者とのコミュニケーションを通して自らの生を蘇らせている[藤澤2014]。藤澤はこうした活動が、表現するプロセスを重視する「プロセスとしてのアート」と言える特徴をもち、治療を目指す医療や福祉でも、鑑賞対象として作品を扱う芸術でもない第三の道を歩んでいるとする。プロセスから生じる他者との関わりは表現者本人の自己意識、〈作品〉の鑑賞者の意識も変化させる[藤澤2014]。そのように芸術概念を再定義し、芸術を介して人間の生の多様性を社会に提示することは、社会の変化を促す原動力にもなると主張する[藤澤2014]。

荒井は、心の病と芸術の関係性に関する研究としては病跡学、芸術療法、アール・ブリュットやアウトサイダー・アートが代表的であったが、最近では作品よりも、それが生み出される場や関係性そのものを芸術として捉えようとする視点があることを指摘しながらも、このいずれとも違う考え方を採用する。荒井は、生み出された作品とそれを生み出す場の力を同時に捉えつつ、人が生きていくことと自己表現がどのように関わるのかを読み解こうとする。そして、事例とした造形教室の重要な特徴は、「治療」ではなく〈癒し〉⁹⁾を目指していること、いかなる形の自己表現でも受け止め合う関係性によって〈癒し〉がもたらされる場が形成されていることであるとする[荒井2023]。さらに、その場はその時々集まった人たちの個性や心の状態による、模倣も再現もできない一回性の出来事の連続で成り立っており、それを保証することで合理化された制度としての医療から振り落とされてしまうものをすくい上げる「出来事としての〈癒し〉」が試みられていると述べる[荒井2023:56]。

そして安藤郁子は、藤澤や荒井などの立場に依拠しつつ、生きづらさを抱えた個人とそこに共にいる個人の相互行為の中で表現が生起するとき、共にいる人自身もつくり変えられていくというプロセスを明らかにしようとする。知的障害と精神障害をもつ男性と安藤自身による表現活動を事例とし、その男性の予想外の行為やそこから生じる相互行為の中で、自分自身がつくり変えられたという実感を重視し、表現活動を通じた著者自身の経験と意識の変容を記述している[安藤・高石2016; 安藤2017]。

(3) 境界線を揺るがすプロセスや関係性

一方で、プロセスや関係性が、関与する人々の非対称な関係を問い直す契機をもたらすという議論も展開されている。

中谷は先に述べた、「こぼれ落ちていくもの」となるような関係性、創作や表現、それにまつわる葛藤や矛盾を含む現場の微細な実践を切り捨てずに社会と結びつけていく芸術のあり方を構築しようとしている事例を挙げる。そこから、自律的で理知的な主体を前提とする美術界に対し、行為や言語コミュニケーションに困難が伴われるような障害者の表現活動では、「異質な者同士の関わりあい、そして創作や表現のミクロな生成過程」に目を向けると「主体の柔軟性・可逆性」が生じると述べる[中谷2009:232]。そうした関わり合いの中には「『芸術』および『障害』という範疇の双方を固定化する一方的なまなざしと非対称な権力関係が透けて見える局面がある」が、「同時に、この微細な相互行為のプロセスそのもののなかに、『芸術(アート)』の多元的な意味合いを胚胎しながら、固定的・非対称的な関係を更新していく契機が存在している」[中谷2009:232]。

田中みわ子は、とあるNPO法人による、障害のある人とスタッフが共に舞う一つの舞台演目を事例とする。日常的で偶発的な身振りから生み出されるその舞いの舞台は、共に舞うスタッフや観客にとっては非日常的な経験の場でありつつ、同時に障害のある身体の日常的な経験に繋がる場にもなり、それが「観客も含めて、障害をもつ身体ともたない身体というカテゴリーが再編される場」であると述べる[田中2006:63]。そこでは、障害のあるメンバーと観客との身体間の差異が「障害のある身体と障害のない身体の非対称性をも絶対的なもの」としつつ、「社会的な『障害』という意味を揺るがし、障害を超える力となりうる」と主張する[田中2006:63]。別の論考では、演劇担当のアーティストと知的障害をもつアーティストによる即興の身体表現を例に挙げる。そこでは、発見されるのを待つ障害者と発見する非障害者という当然視されてきた構図に対し、障害をもつアーティストの能動的な即興表現とそれへの応答を舞台上で実践することで、障害者も能動性を持ち、非障害者もそれと相互に作用し合っているという両者の間の「共犯的な関係」が積極的に提示されている[田中2012]。同様に「障害者アート」においても、専門家と表現者である障害者の間にミクロな権力作用が露呈する接触面にその可能性があるとして述べる[田中2012]。

そして長津結一郎は、岸中が唱えた「共同性」の概念はその曖昧さから様々な形でポジティブな意味合いで使われがちであるとした上で、田中が指摘した「共犯的な関係」を発展させ、「共犯性」という概念モデルを提示する[長津2018]。日常的に関わる人々との関係性から生まれる「共同性」に対し、「共犯性」は、芸術活動などを通じた非日常的な関わりから、芸術家や障害者などの「諸主体の思惑や個別の願いを一元化させずにひとつの場に持ち込むような関係性」であり、主体同士の「差異を差異のまま表現として表出しようとする試み」である[長津2018:174]。このような概念の規定を通して、「共同性」という言葉で見過ごされていた権力性やヘゲモニーの問題に対峙し、「障害／健常」の境界線を揺るがし、さらには全ての関係性を問い直す表現活動の可能性を提起する。同時に、「共犯性」の発露は、現場に差異をめぐるジレンマや逡巡を生むことがあり、一步間違えると権力関係の再生産が起こる危険性を孕むという点にも言及している[長津2018]。

さらに、この時点では「共犯性」は概念モデルの提起にとどまっているとし、中山博晶と長津は、個々の現場での多元的な主体の現れ方や相互行為のあり様をとある演劇ワークショップを事例に検討する。その結果、長津の「共犯性」概念の提起には「共同性」概念が主体間の差異を曖昧化するという批判が含まれていたが、活動のプロセスで『参加者／ファシリテーター』あるいは『障害者／健常者』の線が消失するような共同的な関係性と『役者／演出家』といった新たな線が引かれることによる主体間の差異が差異のまま現れる「共犯的な関係性」が入れ子のように立ち現れることを明らかにしている。そして、そうした多元的な関係性の生起が「障害／健常」の非対称な関係性の問い直しの契機になることを障害者の表現活動の可能性としている[中山・長津2021]。

以上から、障害者の表現活動におけるプロセスと関係性が、活動の主体の多元化と主体間の差異の露呈を通して、非対称な関係と隣り合わせの状況でありながらも、それゆえにこそ「障害／健常」といった境界線を揺るがし更新していく可能性を有していることが、徐々に概念として精緻化されていることが分かる。

3. 考察

以上の結果に基づき、本章ではまず、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品を重視することの問題に対する、活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性に関する議論の位置づけを確認する。その上で、障害者の表現活動の中で未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」の探究に向けて、プロセスや関係性に関わる先行研究が残した課題とそれにアプローチするために必要な視点を検討する。

1. 作品を重視することの問題に対するプロセスや関係性の議論の位置づけ

前章では、芸術的価値の評価や市場と結びつく作品を重視することに対して指摘されてきた問題点を整理した。しかし、作品がその芸術的価値によって社会から評価を得ることでもたらされる効果もある。例えば、前章では概ね批判の対象となっていた「アール・ブリュット」も、障害当事者のエンパワメントという目標と結びついている。後に日本に「アール・ブリュット」という言葉を広め、障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の制定のきっかけともなった「アール・ブリュット・ジャポネ展」が2010年3月から翌年1月にかけてフランスのパリ市立アル・サン・ピエール美術館で開催されたが、その事業目的には「この展覧会を通じて精神科病院や知的障害者施設等を利用する障害者の制作する作品が、芸術的な価値を認められることによる、芸術を通じた障害者のエンパワメントを目指しています」と明記されている[社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団n.d.]。川井田祥子によれば、同展の開催とその成功により、参加した障害のある作家個人のセルフ・エスティームの向上がもたらされた。また、出品された作品はその芸術的価値を正當に評価できる他者と出会い、埋もれることなく積極的に芸術の市場と結びつけられ、経済的価値の実現への道も開かれた[川井田2013]。こうした成果は全面的に否定されるべきものではない。

しかし、そうした成果にも関わらず、なぜ批判的な議論が巻き起こったのか。樋口麻里によると、新自由主義の下での社会包摂の概念は労働市場への参入を第一の道とするが、それは労働市場での経済活動を社会への参加条件とするマジョリティの価値観に基づいている。そこでは前提とされているマジョリティの価値観、及び社会的排除を生み出す雇用以外の多様な社会関係の側面は不問のままとなるため、社会包摂概念そのものが排除を含むという矛盾を抱えている[樋口2016]。ここで前章第1節から第3節を振り返ると、第1節では、「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」という既存の美術用語が日本で障害福祉と結びつき、障害者の創作物と同一視して用いられることで、排他的ニュアンスを薄めながら、実質的には障害者の囲い込みに繋がっているという議論があった。第2節では、福祉の論理と芸術の論理の調和の困難性、また障害者個人の幸福実現が、健常者中心の秩序で成り立つ社会で実利を得ることに依拠しているという指摘に触れた。第3節では、「障害」という属性と結びついた作品の評価による障害者の社会的疎外の再生産、また障害者の作品によってアウトサイダー／インサイダーの境界を揺るがすことを意図しても、結局のところその非対称性を隠蔽しながら、非障害者や美術界が属する「イン」の側がもつ枠組みに依存せざるを得ない構造があるという問題提起に言及した。こうした議論と樋口の指摘を踏まえると、たとえ表現活動を通して障害者のエンパワメントや社会包摂が目指されても、その手段がマジョリティによる芸術的価値の基準や労働市場での経済活動に作品を結びつけることに偏りがちな現状がある。そうした手段は、前述の「アール・ブリュット・ジャポネ展」のように一定の成果をもたらすかもしれないが、そればかりに傾倒した表現活動のあり方では、そこで前提となっているマジョリティの価値観、非対称な関係やそれを生み出すその他の多様な側面は不問に付され、社会包摂と矛盾する要素を帯びてしまい、さら

にそうした要素に対する無自覚やその隠蔽にも陥りかねない。それにもかかわらず、そうした活動がエンパワメントや社会包摂などの言葉と関連づけながら推進されていくことに違和感や疑問が抱かれたために、批判的な議論が起こったと言えるのではないだろうか。そして、社会包摂の概念が内包する矛盾に自覚的に向き合い、社会包摂への逆行を回避しながら障害者の表現活動の可能性を明らかにしようとしたのが、障害当事者だけでなく周囲の人々にも目を向けた、活動のプロセスやその中で関係性に関する議論であった。

前章第4節では、プロセスや関係性への着目が提起された後、それらがもたらすものの顕在化が2つの方向性でなされていると述べた。「障害当事者の生を支えるプロセスや関係性」で触れた論考は、「こぼれ落ちていくもの」となりうる障害者の表現活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性を、障害当事者の生に繋げていると考えられる。そこでは、障害当事者と表現の場を作る人物が、「患者」と「専門家」ではなく友人や仲間のような関係を築き、その場に集まる様々な背景をもつ障害当事者同士でも、互いの存在、そしていかなる形の自己表現をも包容し合う関係性が育まれ、それが生きづらさを抱える障害当事者の生を支えるということが描き出された。一方、「境界線を揺るがすプロセスや関係性」の中の論考は、障害者による創作物を戦略的に市場と接続することで「こぼれ落ちていくもの」がある現実に対して支援者が感じる葛藤や矛盾も重視している。支援者が抱える葛藤や矛盾は、上記の社会包摂概念が内包する矛盾に直面して板挟みを経験した際に生じるものであると考えられる。人と人之間にある境界線を問い直す可能性を障害者の表現活動に見出す研究は、社会包摂概念に内在するそうした矛盾をむしろ戦略的に用いようとしている。多様な主体が関与する表現活動が作り出す場は、「障害／健常」「支援する／支援される」といった非対称な関係と紙一重な場であるからこそ、あるいはそれを生み出す差異を浮き彫りにするからこそ、支援者がそのことに気づかずに非対称な関係に陥ってしまう場合もあれば、支援者が現場での葛藤に対峙し、試行錯誤や逡巡の末に前提となっていた境界線を捉え直す契機となる場合もある。この後者の可能性を顕在化させたのが、「境界線を揺るがすプロセスや関係性」の中で扱った研究であると言える。

2. 「こぼれ落ちていくもの」としての「接面」の探究

最後に、障害者の表現活動におけるプロセスや関係性に関する先行研究が残した課題、そして未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」にアプローチするための視点を検討する。

前章第4節で扱った先行研究は、作品ばかりを重視することで「こぼれ落ちていくもの」となってしまうプロセスや関係性が、障害当事者の生を支えたり、関与する人々之間にある境界線を揺るがしたりするという可能性を有することを顕在化させ、その概念を精緻化させてきた。そうした可能性を生み出す活動のプロセスやその中で関係性というのは、障害者の表現活動の現場において、日常的なケアや表現を通して障害者と支援者の間で少しずつ育まれていくものである。ここで、保育、教育、看護、介護などにおけるあらゆる対人関係の展開の鍵を握るものとして、発達心理学者の鯨岡峻が提唱している「接面」という概念を取り上げたい。接面は、気持ちを向け合う「人と人のあいだに成り立つ独特の空間や雰囲気」を指す [鯨岡 2015:195]。例えば、母親と子ども、臨床家と患者などが双方に何かしらの気持ちを向けて関わり、思いが通じ合った、相手から跳ね返されたと感じるなど、その人と人之間に様々な情動の動きが起こる独特な空間や雰囲気である [鯨岡 2015]。こうした独特な空間や雰囲気、すなわち接面が生まれるのは、日常的なケアや表現を介して対人関係が育まれる障害者の表現活動の現場も例外ではないはずである。接面では、喜怒哀楽だけでなく、ワクワク感、イライラ感、安心感、一体感など、実に多様な情動の動

きが生じるのであり[鯨岡2015]、障害者の表現活動の現場で生まれる接面でもそうした多様な情動の動きが生じている。

また鯨岡は、接面はそれに接する当事者によってのみ捉えられるものであることを強調する。つまり、接面の外部にいる第三者が客観的に観察したり、数値として測定したりして把握できる性質のものではない[鯨岡2015]。そして「人が人に関わる実践の場では必ずや『接面』が生まれ、(中略)接面で生じていることこそ、実践の展開を左右する本質的な問題のはず」であるにもかかわらず[鯨岡2015:206]、対人関係を扱うはずの人間諸科学でも客観主義やエビデンス主義が優勢で、接面が軽視または無視されていると危惧を示す[鯨岡2015]。さらに鯨岡によれば、対人関係を扱う分野に必要な研究のあり方は、研究者が無色透明な観察者となって、研究対象の目に見える行動や言動を記録するのではなく、研究者が関与者としてその場で生まれる接面の当事者の一人となり、研究者自身が「その接面で起こっていることを自らの身体を通して感じ取ることに重きを置く」あり方である[鯨岡2015:206]。そしてその観察結果には、研究者の「一人称の主観的記述が入り込む」こともある[鯨岡2015:209]。

このことを踏まえて障害者の表現活動を改めて考えると、客観的な観察や数値での測定では把握できないという接面の捉え難さは、芸術的価値の評価や市場といった既存の枠組みに依拠して作品を評価する取り組みのあり方から「こぼれ落ちていくもの」となるプロセスや関係性と重なり合う。つまり、障害者の表現活動で接面が生成されるのは、活動のプロセスやその中での人々の関係性においてであり、それは作品そのものに表出して客観的に把握されることが困難な性質をもつと考えられる。そして、接面で生まれる情動の動きやそれをもたらすものごとくもまた作品には表れにくく、容易に「こぼれ落ちていくもの」となってしまうと言えるのではないだろうか。

プロセスや関係性に着目した先行研究は、人々の関係性が生きづらさを抱えた障害当事者の心を癒してその生を支えていくこと、はたまた社会包摂概念が内包する矛盾によって生じる葛藤が非対称な関係と隣り合わせでありながら、逆にその境界線を揺るがす契機になりうることを緻密に描き出している。これらは、作品という形で伝えることが困難で「こぼれ落ちていくもの」となってしまうような接面で生じることを、概念化や理論化を通して顕在化させていると考えられる。これらの先行研究はまた、鯨岡が批判するような客観主義ではなく、研究者たちは綿密なフィールドワークやインタビューにより、研究対象とした場で生成された接面にその当事者として接しているように見受けられる。ただし、鯨岡による研究者自身の主観の重視という点から考えると、それらは障害者を中心に据える前提をもった上で、接面で生じていることの一側面を拾い上げ、顕在化させてきたと言えるのではないだろうか。言い換えれば、障害当事者の内面や変化の理解、障害と健常にまつわる問題にこれまでは焦点が定められ、接面で生じる研究者自身や支援者の微細な情動の動き、研究者自身や支援者にとってそれが帯びる意味は積極的に拾い上げられる対象ではなかった⁶⁾。接面で生じていることの中には、未だ触れられていない側面、すなわち未だ研究によって顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」が残っていると考えられる。

本節をまとめると、障害者の表現活動の現場では、日常的なケアや表現を介して、活動のプロセスやその中での人々の関係性において接面が生まれ、そこで様々な情動の動きが生じるが、それは作品には表出しにくく「こぼれ落ちていくもの」となりうる。プロセスや関係性に着目した先行研究は、障害者を中心に据える前提のもと、接面で生じることの一側面を拾い上げ顕在化させてきた。そこで筆者が提案したいのは、研究者自身が接面に接する当事者として現場に関与し、障害者を中心に据える前提を一旦取り払った上で、障害者だけでなく、研究者自身や支援者の情動の動き、研究者自身や支援者にとってのその意味を丁寧に描き出すという研究における視点であ

る。これは、接面で生じることのうち先行研究では十分に探究されてこなかった側面、すなわち未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」にアプローチする糸口になるのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、国内の障害者の表現活動において、芸術的価値の評価や市場と結びつく最終形としての作品ばかりでなく活動のプロセスやその中で生まれる人々の関係性に着目した先行研究を軸とした文献レビューを行い、そして先行研究によっても未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」を探究するために必要な視点を検討した。最終的に「接面」という概念に着目し、障害者の表現活動におけるプロセスや関係性の中で生成される接面やそこで生じる情動の動きが「こぼれ落ちていくもの」になりうることを指摘した。プロセスや関係性に関する先行研究は、障害者を中心に据える前提のもと、接面で生じることの一側面を拾い上げ、顕在化させてきたのであり、それは同時に、接面で生じることの中には、まだ触れられていない側面、すなわち未だに顕在化していない「こぼれ落ちていくもの」があることを意味している。そこで、それを探究するために、日常的なケアや表現の現場を通して人と人の間に生まれる接面に、研究者自身が当事者として接し、障害者を中心に据える前提を取り払った上で、障害者だけでなく、研究者自身や支援者の情動の動き、研究者自身や支援者にとってのその意味を丁寧に描き出すという研究の視点を提案した。

本研究が残した課題としては、研究の視点の提案にとどまっているという点がある。具体的な研究方法、現場への関与や研究結果の記述の仕方などの検討と提案については、稿を改めて論じることとしたい。

謝辞

本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2136の支援を受けたものである。

註

- 1) 本稿では、芸術の既存の形式や枠組み、価値観などでは捉えることの難しい活動も含めることを意図して「表現活動」と表記する。ただし、文献を引用する際は引用文献中の表記に基づいた言葉を選択用いることとする。
- 2) 障害者の表現活動において活動を共にし、あらゆる類のサポートをする人を総じて「支援者」と表記する。ここでは、障害福祉施設の職員、障害当事者の家族、活動に関わるアーティストなどが含まれる。
- 3) なお、治療や教育を目的とする、芸術療法、特別支援教育や美術教育での議論は本研究では扱っていない。
- 4) 本稿で引用した文献が、その出版年よりも前に書かれた論文を元としている場合や、それ以前に出版された書籍の文庫版である場合、同一著者による複数の論考をまとめて記載した方が良く判断された場合は、出版年が年代順となっていない箇所がある。
- 5) 荒井は、この造形教室では「治す」と「癒す」が明確に区別されているとし、「癒す」は世間的な意味とは異なる内容を含むために「<」で強調している。「治す」では、医療者が行為の主体となり、医療行為を通して受動的な立場の患者の「病氣」を除去することが目標とされる。一方で「癒す」は、「何らかの受苦・受難の渦に巻きこまれた人が、自らの混沌とした内面と向き合い、自己表現を通じて外部に放出することで、直面している困難を耐え忍び、生きる支えと拠り所を見出していく能動的な営み」を意味する[荒井2023:53]。
- 6) この点で、安藤による研究は示唆に富む。障害当事者との表現活動を通して研究者自身が抱いた驚きや喜び、「つくり変えられた」という実感を述べており、接面の記述への接近が感じられる[安藤・高石2016;安藤2017]。

参考文献

- 安藤郁子, 2017, 「表現者と共にいるということ: 生きづらさを抱える人の芸術表現に関する実践的研究(2)」『美術教育学』38, pp. 27-43.
- 安藤郁子・高石次郎, 2016, 「表現者と共にいるということ: 生きづらさを抱える人の芸術表現に関する実践的研究」『教育実践学論集』17, pp. 243-254.
- 荒井裕樹, 2023, 『生きていく絵: アートが人を<癒す>とき』ちくま文庫.
- 藤澤三佳, 2001, 「障害者と芸術にかかわるフィールドワークから」『ソシオロジ』45(3), pp. 103-110.
- 藤澤三佳, 2014, 『生きづらさの自己表現: アートによってよみがえる生』晃洋書房.
- はじまりの美術館, 「展覧会 第1回福島県障がい者芸術作品展『きになる⇄ひょうげん2017』」
<<https://hajimari-ac.com/enjoy/exhibition/kininaru-hyogen2017/>>(参照2024-2-4).
- はじまりの美術館, 「ご挨拶」, <<https://kininaru-hyogen.info/about>>(参照2024-2-4).
- 服部正, 2009, 「日本の福祉施設と芸術活動の現在」藤田治彦編『芸術と福祉: アーティストとしての人間』大阪大学出版会, pp. 241-262.
- 服部正, 2015, 「障がい者の創作物はいかに評価されるか: 第55回ヴェネチア・ビエンナーレの出品作をめぐる一考察」『甲南大学紀要 文学編』165, pp. 187-197.
- 服部正, 2018, 「障がい者アートとしての和製アール・ブリュット」『民族芸術』34, pp. 101-107.

- 服部正, 2019, 「現代の『アール・ブリュット』と日本の作品」『臨床精神医学』48(3), pp. 317-324.
- 服部正, 2020, 「障害者の芸術活動の今日的課題」『民族藝術学会誌 arts/』36, pp. 38-41.
- 樋口麻里, 2016, 「『社会的包摂』概念の理論的限界: 精神障がい者の社会的排除問題からの再起的検討」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』42, pp. 163-187.
- 本間真宏・堀尾恵太郎, 2004, 「知的障害児(者)の芸術と創作活動とその援助」『東京家政大学研究紀要』44(1), pp. 137-144.
- 飯守桂一, 2018, 「『アート』『障害』『施設』を巡るまなざし: 大阪阿倍野『アトリエコーナス』の活動を事例に」『待兼山論叢 日本学篇』52, pp. 97-116.
- 川井田祥子, 2010, 「障害者の芸術的表現による社会的包摂とその支援に関する研究」『文化経済学』7(2), pp. 41-52.
- 川井田祥子, 2013, 『障害者と芸術表現: 共生的なまちづくりにむけて』水曜社.
- 岸中聡子, 2004, 「『障害者アート』と『共同性』: ある知的障害者施設の創作現場から」『現代文明学研究』6, pp. 372-387.
- 鯨岡峻, 2015, 「『接面』からみた人間諸科学」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエヴィデンスとは何か: 現象学と実践をつなぐ』新曜社, pp. 187-228.
- 久保田翠, 2020, 「分断を超え新しい価値観を創造していく『表現未満、』プロジェクト」認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ編, 『『表現未満、』プロジェクト2019トーク&活動記録集』, pp. 84-85.
- 村谷つかさ, 2018, 「障がいのある人の創作活動を社会との関係で捉え直す: 活動の論点整理と推進の仕掛け」『文化政策研究』12, pp. 47-67.
- 長津結一郎, 2018, 『舞台の上の障害者: 境界から生まれる表現』九州大学出版会.
- 中務のぞみ, 2010, 「障害者とアート: アウトサイダー・アートを中心に」『文化/批評』2, pp. 26-41.
- 中谷和人, 2009, 「『アール・ブリュット/アウトサイダー・アート』をこえて: 現代日本における障害のある人びとの芸術活動から」『文化人類学』74(2), pp. 215-237.
- 中山博晶・長津結一郎, 2021, 「障害のある人が『役者』になることの意味: A文化センターでの演劇ワークショップを事例に」『質的心理学研究』20, pp. 125-131.
- 西研, 2015, 「人間科学と本質観取」小林隆児・西研編著『人間科学におけるエヴィデンスとは何か: 現象学と実践をつなぐ』新曜社, pp. 119-185.
- 大木秀一, 2013, 『文献レビューのきほん: 看護研究・看護実践の質を高める』医歯薬出版.
- SEINO, 2016, 「障害の社会モデル的立場から障害者問題を喚起する芸術の社会的効能」『障害学研究』11, pp. 156-179.
- 社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団「この展覧会について」, <<http://www.art-brut.jp/about.html>> (参照 2023-11-12).
- 武山梅乗, 2018, 「〈アウトサイダー〉アート: 障がい者の創作行為をどうとらえるべきか」『駒沢大学社会学研究』50, pp. 83-98.
- 田中みわ子, 2006, 「つくば市NPO法人『自然生クラブ』芸術実践にみる障害の身体: 和太鼓による田楽舞いを事例として」『文化交流研究』1, pp. 57-69.
- 田中みわ子, 2012, 「障害者のアートが問いかけるもの: 『表現』をめぐるコンフリクト」中邑賢龍・福島智編『バリアフリー・コンフリクト: 争われる身体と共生のゆくえ』東京大学出版会.
- 知足美加子, 2008, 「障害者の他者性と芸術表現」『デアルテ』24, pp. 37-53.